

子育てに楽観的になれる要因に関する研究

阿保知映¹⁾、古川照美²⁾

1) 青森県立保健大学大学院 健康科学研究科、2) 青森県立保健大学

Key Words ①親準備性 ②楽観性 ③乳児と関わった経験

I. はじめに

日本では1975年から少子化が始まり、2023年の合計特殊出生率は1.20と過去最低であった¹⁾。同じ日本だが沖縄県は最も合計特殊出生率が高い。沖縄県は子育てや世間体のプレッシャーがない分、楽しく子育てしている可能性がある²⁾。価値観については、日本は「リスク回避傾向」だが、欧米は「将来はなんとかなる」と思っている人が多く²⁾、沖縄県の「なんくるないさ」という楽観的とも言える考えと共通している。子育てについて、日本は「世間体重視」「子どもをよりよく育てる」ことへの意味づけが強いが、欧米は「子育てが楽しい、自分を成長させる」との意味づけが中心であり²⁾、楽しく子育てしていると考えられる沖縄県と類似性がある。子育てや子どもの将来について楽観的に考えられることや、喜びや楽しさなどが上回ることが、子どもを産み育てたいと前向きに考えられる要因になっている可能性がある。

II. 目的

子どもを産み育てたいと前向きに考えられる要因について、楽観性と親準備性に着目し、明らかにする。それらの結果をもとに、青年期までの少子化対策の方略に示唆を得る。

III. 研究方法

1. 研究デザイン 横断研究
2. 研究対象者 青森県の大学・短期大学全15校、沖縄県の大学・短期大学全9校へ文書と電話にて調査協力を依頼した。青年期でも、最も近い将来、社会に出て子どもを産み育てる可能性があること、子育て経験がない者が多いことから、大学・短期大学の最終学年の学生を対象とすることとした。
3. データ収集方法 研究実施の承諾が得られた大学・短期大学において、Webによる無記名自記式質問紙調査を行った。調査項目は、属性、子どもを産み育てたいか、乳児と関わった経験の深さ、乳児ふれあい体験への参加、子どもを産み育てる意味、得られると思う子育て支援、将来、子育てをする場合何が不安か、親準備性尺度⁵⁾、楽観・悲観性尺度⁶⁾、子どもを産み育てたいか肯定群には、自分の子どもは多い方が良いか、現実的に欲しい子どもの人数、否定群には子どもが欲しくない理由とした。
4. 分析方法 回答があった者のうち、子どもを産み育てたことがある者、25歳以上の者、無効回答がある者、各県10年未満在住者を除外し、10年以上在住者を解析の対象とした。10年以上在住とした理由は、青年期をその県で過ごしたためである。各県をグループ変数とし、各質問の有意差の有無をFisherの正確確率検定、尺度はWilcoxonの順位和検定で分析した。次に、地域レベルの変数(青森県・沖縄県)が、個人レベルの変数(将来、子どもを産み育てたいか)へ影響しているかを探るため、各県をグループ変数として級内相関係数を算出したところ、 -0.003 ($P=0.461$)であった。よって、個人の特徴の効果と判断し、ロジスティック

ク回帰分析を実施した。その後、青森県と沖縄県を分けて「将来、子どもを産み育てたいか」と各質問について Fisher の正確確率検定、尺度は Wilcoxon の順位和検定で分析し、「将来、子どもを産み育てたいか」を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。

IV. 結果

研究協力を得られた大学・短期大学に在籍の最終学年の学生は 4,680 名であり、558 名から回答を得た(回収率 11.9%)。さらに上記の要件を満たす 359 名を解析対象とした(有効回答率 7.7%)。

「将来、子どもを産み育てたいか」は、青森県と沖縄県で有意差はなかった。「将来、子どもを産み育てたいか」を従属変数、青森県と沖縄県で有意差があった変数を独立変数としたロジスティック回帰分析の結果、「乳児と関わった経験の深さ」の「お世話したことがある」(OR=5.443、P=0.037)「得られると思う子育て支援の種類」の「親・自分のきょうだい以外の親戚」(OR=0.200、P=0.010)、親準備性尺度の「乳幼児への好意感情」(OR=1.083、P=0.031)「育児への積極性」(OR=1.401、P<0.001)であった。「将来、子どもを産み育てたいか」肯定群のみへの質問、「現実的に欲しい子どもの人数」について、青森県は 1 人・2 人、沖縄県は 3 人以上の割合が高かった(P<0.01)。

青森県のみ「将来、子どもを産み育てたいか」を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果、「将来、子育てする場合、何が不安か」の「子育てよりも仕事を優先したい」(OR=0.624、P=0.050)、「はっきりしないが漠然とした不安がある」(OR=0.373、P=0.034)、親準備性尺度の「乳幼児への好意感情」(OR=1.211、P<0.001)であった。沖縄県のみでは、「将来、子育てする場合、何が不安か」の「世間体の良い子どもを育てる自信がない」(OR=0.057、P=0.048)と「子育ては精神面での負担が大きそう」(OR=0.183、P=0.005)であった。

V. 考察

本研究結果の「親準備性が高いこと、乳児と関わった経験が深いことが、将来、子どもを産み育てたいと考えることに関連がある」は、先行研究⁷⁾と矛盾しない。青年期までに乳児への好意感情が育まれる環境をつくることや乳児との関わりを持つことが親準備性を高める可能性がある。楽観性が「将来、子どもを産み育てたいか」に最終的に関連がなかったのは、子どもを産み育てることに焦点を当てた尺度ではないこと、楽観的な社会が影響している可能性があること、調査対象が大学・短期大学の学生であり、学歴が高い者が多いことが影響した可能性がある。両県とも、肯定群では親やきょうだいなど身近な家族からの支援を得られるとの回答が多く、否定群では親戚や公的サービス等が多い傾向があった。家族等、身近な人からの支援が、子どもを産み育てたいと前向きに考えられる要因として関連があると思われた。

VI. 文献

- 1) 厚生労働省. “令和 4 年(2022)人口動態統計(確定数)の概況”. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei22/index.html>
- 2) 山田昌弘. 日本の少子化対策はなぜ失敗したのか? 結婚・出産が回避される本当の原因、165-169、118-156、105-112、光文社新書、2020
- 3) 若島孔文、須永直人、野口修司: 少子化問題に関する調査研究、立正大学心理学研究所紀要、6、27-49、2008
- 4) 仲村美津枝: 沖縄県 2 市の家族計画実態調査からみた少子化に関する研究、琉球医学会誌、21 (3-4)、151-159、2002
- 5) 佐々木綾子: 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討、福井大学医学部研究雑誌、8 (1)、41-50、2007
- 6) 外山美樹: 楽観・悲観性尺度の作成ならびに信頼性・妥当性の検討、心理学研究、84 (3)、256-266、2013
- 7) 阿保知映、古川照美、佐藤愛: 赤ちゃんふれあい体験学習の親性準備性、向社会的行動への影響、母性衛生、63 (3)、2022

*連絡先: 〒030-8505 青森市浜館間瀬 58-1 E-mail: 2382001@ms.auhw.ac.jp